

空間体験と人間

Space Experience and Human Beings

小 田 隆 博

ODA Takahiro

Abstract: Space does not appear before us as existence to have extent of homogeneity. Space is tied to our acts and experiences. Space appears before us as existence to have various meanings. We human being acquires various meanings while I do space experience. In this paper, we considered the meanings of space experience and the influence that space experience gave to a human growth process.

【**keywords**】 Space Experience, Image Map, Self

I はじめに

私たちは時間的空間的広がりを持つ世界のなかに存在するとともに、さまざまな対象をそうした広がりを持つ世界の出来事として知覚し、体験している。

朝起きる行為に始まり、夜床に就くまでの時間的な流れのなかで、私たちはさまざまな行為を行っている。朝食を摂り、家の玄関から駅に向かって歩く行為は、主体である身体が、空間的な広がりから自らの行為とともに体験することを可能にするばかりでなく、駅に着くために必要とされる時間的な広がりを確認することも可能にする。空間的な広がりとは時間的な広がりとは、私たちの行為を介して、密接に結びついているのである。私たちは自らの行為を介して、時間的空間的な広がりを知覚することができる。私たちの知覚には、対象に対する時間的空間的な広がりへの理解が、同時に含まれているのである。それは、「知覚するわれわれ自身が空間的時間的な生存様式に拘束されているからだ。対象それ自身が空間的時間的に存立しており、それに対して、われわれの身体そのものも空間的時間的に反応しつづけている」¹⁾からである。

人間の一生には、生まれてから老いるまでに一つのサイクルがある。こうしたサイクルをライフサイクルとして捉え、私たち人間が、それぞれの年代に持つ課題について考えるとき、時間的な流れのなかに横たわる私たちの身体が、「成長」という言葉とともに、結果として引き受けることになる固有の課題が、さまざまな形で存在することが指摘されている。シェイクスピアは、『お気に召すまま』のジェイクズの台詞のなかで、「男一人の一生の、そのさまざまな役どころ、幕は、七つの時期になる」として、私たちが成長する過程で、その年代ごとに背負う課題を指摘している。「世界はすべてお芝居だ」考えるシェイクスピア

は、その成長過程を、7つの段階からなる役割の束として捉えている。シェイクスピアが指摘するその役割は、赤ん坊、学校子供、恋人、兵隊、裁判官、間抜け爺、そして第2の嬰兒である²⁾。

人間のライフサイクルを、7つの段階に分け、その段階固有の課題を一つの役割として表現することは、私たち人間が持つ時間的な広がりを持つ世界を、年代毎に背負う役割として分節し、意味づけることが可能であることを示している。そして、私たちはこうした役割を演じるなかで、人間としての自己を形成しているのである。私たちの自己形成と関係する空間体験は、それぞれの年代が持つ固有の役割体験の束として、存在する。ところがこうした役割は、私たちの空間体験とのみ、結びつく訳ではない。空間的な広がりを持つ世界のさまざまな体験と結びついた役割も存在するのである。

本稿では、私たち人間が自己を形成するなかで、空間体験の持つ意味について考察する。

II 空間の形成

1. 分節される空間

私たちが知覚するものは、客観的对象として存在するだけでなく、意味の対象としても存在している。この二つは不可分の関係にある。＜事物というもの＞と＜意味というもの＞は、別に存在して結び付けられるのではない。事物は意味付けられた対象として、私たちの前に現れるのである³⁾。

私たちの前には広大な空間が、その広がりを見せている。その空間のなかで、私たち人間以外の動物を含め、それぞれが自らの生活空間を形成している。そしてその生活空間のなかの関係の構造が、空間のなかに存在する事物を、私

たちの前に意味ある対象として、登場させるのである。

ユクスキュルによれば、私たちが路上で猛犬に吠えられ、その猛犬から逃れるために、路上の石を拾い、猛犬に投げつけてその場の危機を脱出したとする。私たちは、道路に敷かれていた石と猛犬に投げつけられた石が、「石」という同一の対象であることを決して疑うことはない。石の形も、重さも、その物理的・科学的特性も、私たちが石を拾い、猛犬に投げつけた前後で、変化することはない。石の色や、堅さや結晶構造も、そうである。しかし、私たちが手にした石には、根本的な変化が起きたのである。それは、石がその意味を大きく変化させたからである。

道路に敷かれている石は、私たち歩行者の足を支える役割を果たしている。日常の歩行という行為のなかで、私たちが道路に敷かれている石の1つ1つを、知覚の対象として意識することは、普段あまりあり得ないことである。しかし、猛犬に吠えられるという危機の場面で、私たちが咄嗟の行為として道路の石を猛犬に投げつけたとき、その石は歩く行為を支援する役割から、「手榴弾」という固有の意味を持つ事物として、私たちの意識の対象になったのである。「観察者の手の中に何の関係もない対象物としてのある石は、主体に対して関係を生じるとすぐに、意味の担い手に変化した」のである。つまり、関係を結ぶことにより、「対象物は主体の手で刻みつけられる意味の担い手に変化した」のである⁴⁾。こうした主体による対象の意味作用は、対象を意味により分節化する行為である。

トゥアンは、人間の意識の発達と空間的分節化には、密接な関わりがあると指摘する。若い夫婦と子どもの家庭では、空間は差異化されていない。子どもが小さなときは、母親の膝の上にすわり、母親の皿から一緒に食事を摂る。それが少し大きくなると、食堂のテーブルに自分の場所を持ち、自分の皿から自分の箸で食事を摂るようになる。「家の空間は、家族が年をとるにつれて用途別に分節化」されるのである。子どもが自分の場所を持つのは、食堂のテーブルだけではない。家のなかに自分の部屋を持つようになる。そして、個別の空間を有する子どもたちは成長するにつれて、「自分自身を意識の中心」として自覚するようになるのである⁵⁾。

空間が共同利用の場から、個別利用の場へと分節化される過程は、私たち人間にとって、「自分自身を意識の中心」として自覚する過程であり、それは近代的な個人が形成される過程でもある。意識の中心を自分自身のなかに持つ近代的な個人には、その個人としての意識を育む空間の形成が求められたのである。こうした個人が専有する空間の形成は、近代的な個人として成立した私たちの意識の前提としてのプライバシーが成立する過程でもあった。

17世紀の終わりまで、相互につながった部屋は、個人のプライバシーを確保することを困難にしていた。個人のプライバシーを確保するためには、部屋の数を増やし、その用途を制限する必要があった。つまり空間を、その用途により分節する必要があったのである。それ以前には、寝室

のプライバシーすら保証されていなかった。こうした状況を、トゥアンは次のように記述している。「他人と寝室を共にするのは、現代人にとって気分の悪いことである。しかし昔の人々は、高貴な人であっても卑しい人であっても、睡眠に別々の部屋が必要であるとは感じていなかった。中世をさかのぼればさかのぼるほど、人々が個別には寝ていなかったことがわかる。(中略)ミケランジェロは彼の職工たちと、一つのベッドに四人で寝ていた。(中略)太陽王は、毎朝八時十五分に王を起こすことが仕事である第一従者と寝室を共有していた」のである。そして、こうした「相互につながった部屋はプライバシーの確保を不可能か、あるいはそうでない場合でも困難なものにしていた」というのである⁶⁾。

分節される空間は、プライバシーの意識を持つ近代的な個人と密接な関係を持つ。それは、分節された個人空間の誕生が、個人と神との対話を可能にし、近代的な個人の成立を可能にする内面を、彼のなかに作り出すからである。

2. 風景としての空間

自然と人間との関係が、意味的な表象として現出されるとき、それは私たちの前に風景として現れてくる。

私たちが異郷を旅して出会う山や川、樹木や建物から構成される空間は、その空間を構成する建物や樹木のの一つ一つが、さまざまな関係と構造を持つことで、生きた全体として存在している。その生きた全体が私たちの前にその姿を現すとき、それは風景として登場するのである。異郷を旅して私たちが出会うのは、一つの風景であり、風景のなかのさまざまな事物である。そしてその「風景こそは、歴史的・文化的人間の生と自然的・風土的生の一つの総合、一つの結合として」、私たちの前に現象するのである⁷⁾。

「一つの総合」としての風景が、私たちの前に現象するとき、その風景は「歴史的・文化的人間の生と自然的・風土的生」を、地名としての言葉のなかに凝縮した形で、私たちの前に現れる。大藤時彦氏は、日本の地名の多さを指摘する。それは、国土が山川溪谷によって細分され、さまざまな地形地貌を呈していて、その上に営まれる人間の生活が多様な複雑性を示しているからである。こうした多様な複雑性を示す生活の営みは、個々の小地域に、それぞれ異なる地名を必要としたのである⁸⁾。

多様な複雑性を示す生活の営みは、自然と人間との関係の多様なあり方を示している。そしてその多様な関係の構造が、自然としての空間を、私たちの前に、さまざまな貌を持つ風景として現象させるのである。自然としての空間が、ある一つ風景として私たちの前に現象するとき、そこには空間を一つの風景として表象する言葉が必要となる。地名が、私たちの前に存在するのは、そうした理由からである。

柳田国男氏は、地名を二人以上の人間が共同に使用する符号と定義している。「定住産業に従事せぬ人民は土地を区画する必要がないので、土地の命名はひとしく生活の必

要にもとづくとしても、狩猟や採取またはそのための旅行の目的のみに土地を使用している者には、地名をつける必要は単に目標用であり、「一段進んで定期の占有を必要とする職業、たとえば林業・農業などに従事する者にいたって、はじめて細かな地名をつけて、忘れないでおくという必要が生ずる」のである⁹⁾。

柳田氏は、日本の地名の数は少なくとも数千万、ことによれば、億という数にも達していると指摘するなかで、独自の分類方法を提案している。その分類によれば、地名が発生した新しい順に、「分割地名」「占有地名」「利用地名」に分かれている。「分割地名」は、区画された地域を、新たに二つ以上に区分けする必要が生じたとき、すでにある地名に、上中下や東西南北の方位を冠したり、番地を付加するものである。「占有地名」は、人間が広漠の山野を区画して、自らの所有であることを示すときに用いるものである。この地名は、自らの所有を他人に示すものであるが故に、個人の趣味や思いつきを多数者に強制することは容易でない。当然、「占有地名」以前に存在する地名を何らかの形で採用することになる。そして三つのなかで最も起源が古いのが、「利用地名」である。この地名の特徴は、「単なる遠望によって行旅水運の目標としたものから、ウルイ沢・鷹の巣山の類の採取物によったものまで」、私たち人間との「生活の交渉」に基づいて付けられたことにある。私たちが生活する空間を、利用形態や「生活の交渉」が持つ関係の構造により分節するだけでなく、意味ある空間として知覚可能な対象にしたのが「利用地名」の役割である¹⁰⁾。

熊本市川尻町では、商家の勝手口から川に降りる石段の下、波に洗われるあたりをクミズと呼んでいる。このクミズという地名は、他の場所にも存在するが、こうしたクミズという地名があるからこそ、家々の主婦や娘たちが日課として川から水を汲んだり、時には川の水を利用して洗濯する風景を思い浮かべることができる、と谷川健一氏は指摘する。クミズで水を汲む風習は、水道の普及とともに消えていったが、かつての庶民の暮らしの風景が、クミズという地名を持つ空間に、記憶として残されているのである。地名を持つ土地は、「古代寺院の滑らかなな光沢をおびた敷石のように、時間が空間として凝固した」風景を背後に持つ空間として存在する¹¹⁾。

Ⅲ 空間の変容

1. イメージとしての空間

ある空間に地名が存在することは、その空間が、私たち人間が形成する社会生活と密接に関わりを持つ形で捉えられ、位置づけられた存在であることを示すだけでなく、私たちのなかに、そうした空間を社会との関わりで対象化し、「領有する象徴的な行為」が存在することを示している。地名の存在する空間は、その名前により「環境空間の社会的な構造化」を表象し、その「環境空間をめぐる諸関係や歴史的な出来事を」表象するのである。地名には、「その

土地で生じた出来事の記憶」が結びついているだけでなく、地名として空間に名付けられた時代の「社会的な編成」が、歴史の記憶として蓄積されているのである¹²⁾。

空間は、私たちの社会生活との関わりをなかで分節され、構造化されるとともに、社会的な布置として再編される。そしてその再編の過程で、一つの地名を持つ空間として表象されるのである。地名として表象された空間は、さまざまなイメージを伴う空間としても存在する。

「原初的、伝承的社会は周りの世界をひとつの小宇宙として認識する。この閉ざされた世界の最果てに、未知の、未形成の領域が始まるのである。一方には人が住み、組織を形成しているがゆえに宇宙と化している空間があり、他方、この親しまれた空間の外側には悪魔、怨霊、死者、そよ者の未知の恐ろしい領界、つまり、混沌、死、夜があるのだ。住まわれた小宇宙が混沌や死者の王国に比せられる荒涼たる領界にとりこまれているというこのイメージは、中国やメソポタミアやエジプトのように極めて進んだ文明においてさえなお生きていた。事実、多くのテキストが国境を襲おうとしている外敵を怨霊や悪魔や混沌の悪霊に擬している」と、エリアードは指摘する。「怨霊や悪魔や混沌の悪霊」に擬されているのは、「国境を襲おうとしている外敵」だけではない。「都市の外壁は悪魔、悪病、死に対する防壁として祭儀によって浄められた」とあるように、「人が住み組織を形成」し、宇宙の秩序を構成する空間が存在する傍らに、「混沌、死、夜」の支配する空間が存在したのである。こうした原初的な世界では、空間の持つイメージが、さまざまな形でその生活を支配する。そこでは「聖なる空間が本質的に『実在する空間』」とされるのである。それは、原初的な世界では、「神話だけが実在する」とされているからである¹³⁾。

神話的な空間のイメージが存在するのは、原初的な世界だけではない。

空間が、分節され構造化されるのは、混沌とした自然としての空間に、新たな秩序を与えるためである。そしてこうした秩序が、さまざまな形で組み合わされることにより、私たちの生活のなかに、文化が多様な形で形成されるのである。秩序と混沌との境界は、何時も固定しているわけではない。それは絶えず移動することにより、空間がその布置として持つ意味やイメージを、多様に変化させることを可能にする。「文化は様々の記号を介して『混沌』を自らのシステムの内側にとり入れようとする。一方では排除しつつも、それを文化の全体性の不可欠の部分として、人は混沌を片隅に追いやりながらも保持」¹⁴⁾していくのである。

秩序の傍らには、混沌が必要である。私たちが秩序を秩序として認識可能なのは、秩序と対比可能な混沌の存在が、常に前提とされている。空間が分節され、新たな秩序のもとに構造化される為には、そうした秩序を意味ある空間としてイメージ可能であることが必要とされる。現代の神話的な空間のイメージは、秩序と混沌が交錯する境界の狭間

に存在する。

2. 都市的空間の形成

旧約聖書のカインは、都市の最初の住人として知られている。エデンの東にあるノドの地に住んだカインは、自らの子であるエノクと同じ名前の都市を作り、その都市の最初の住民となった。エデンの東に移り住んだカインが、都市の最初の住民となったのは、神から「地上の放浪者」として生きる裁きを受けたことによる。カインが「地上の放浪者」としての裁きを受けたのは、弟のアベルを殺害することで、人類最初の殺人者となったからである。旧約聖書によれば、人類最初の都市は、殺人という罪を犯すことで自らの故郷を追われたカインにより、作られたことになる。故郷を追われた「地上の放浪者」が、安住の地を求めて最後にたどり着いた場所が、都市としての空間なのである。

都市という空間に生活の場を見出したカインの子どもたちは、さらに自らの子どもを残すことで、「家畜を飼う者の先祖」、「琴や笛を執る全てのものの先祖」、「青銅や鉄のすべての刃物を鍛える者」たちが生まれることになった。故郷を追われることで「地上の放浪者」となったカインが最初の住民である都市的空間では、土地を耕しても、その土地はもはやカインのために実を結ぶことはない。そして、その実を結ぶことのない都市的な空間こそ、カインの子孫たちが、多種多様な活動を分業という形で担うことになる空間として登場したのである。

旧約聖書のカインは、殺人という罪を犯すことで、反社会的な存在となった。しかしそのことにより、自らが作り出した都市的空間のなかに、彼自身は新たな社会を生み出す存在となった。弟のアベルを殺害した罪により、それまで自らが属していた社会を追われた殺人者としてのカインは、その反社会的な行為故に、新たな都市的な空間に、もう一つの社会を生み出す存在として登場したのである。反社会的な行為が、新たな社会性を生み出すという逆説が、ここには存在したのである¹⁵⁾。

都市的空間については、M. ウェーバーによる経済学的な定義がある。都市は、人びとが住むまとまりのある集落であり、①量的空間的範囲を持つ、②定住する人びとの生計が、商工業的活動から得られる、③その空間に市場を持つ、というのがそれである。それに加え、住民相互間の個人的対面的「知合関係」の欠如、つまり匿名的関係の存在を、社会学的な定義として指摘している¹⁶⁾。

ウェーバーの古典的な定義を前提に、都市的空間は、その後さまざまな定義がなされてきた。こうした都市的空間の定義を、藤田弘夫氏は、次の2つに整理可能だとしている。①都市的空間の物的構造の特徴を、人口の量や密度と関連させて規定するもの。具体的には「都市は周辺に対して、相対的に大きな人口量と高い人口密度を持った聚落だ」というもの。②都市的空間が持つ政治、経済、社会形態に注目してその概念を規定するもの。例えば、都市に「典型的に表れる社会的行為や社会組織の諸形態の発見」を行う

ことで、都市に特徴的な生活様式を解明しようとするものである¹⁷⁾。

旧約聖書にあるカインの話は、都市に特徴的な生活様式の起源を、一つの物語として私たちの前に示している。その物語のなかで都市は、土地を耕して生計を立てる空間である村を追われた人びとが暮らす世界として描かれている。旧約聖書の都市的空間は、土地を耕して生計を立てる人びとの住まう村を前提として、存在したのである。

都市的空間の成立と、農業生産を中心とした農村には、密接な関係がある。都市は、その都市に住まう多くの人びとの生活を保障しなくてはならない。こうした都市の成立は、周辺の村落を急激に「農業化」したのである。「農耕集落としての村落は農村へと変貌」したのである。「都市が出現するまで農民はいなかった。都市と無関係に生産しているのは未開民族であって、農民ではなかったのである。(中略)都市は外部の村落を“農村”として内部化するとともに、そこでの生活を秩序づけていった。つまり「都市化」と「農村化」とは表裏一体のもの」だったのである¹⁸⁾。

都市的空間の形成は、農業生産を中心とした村落を、農村という新たな空間として私たちの前に現したのである。

3. 演出する空間

空間をさまざまな形で分節することは、意味の体系を持つ構造のなかに、それを位置づけることで、空間を私たちに知覚可能な対象とする行為である。空間の分節化は、私たち人間が創り上げている意味の場のなかに、客体として存在する空間を組み入れることで、それらを知覚可能にする行為でもある。

空間を意味あるものとして私たちの前に現出させるのは、空間的な広がりを分節する作業にのみ存在するのではない。時間的な分節化の作業のなかで私たちの空間は、季節の変化や人びとの生活と結びついたさまざまな意味を、空間のなかに記憶として蓄積させていくのである。

「遊歩者というタイプを作ったのはパリである。それがローマでなかったというのは奇妙なことである。それはどうしてであろうか。ローマでは、夢さえもおきまりの道に行くのではなかろうか。そしてこのローマは、神殿、建物に囲まれた広場、国民的聖所があまりに多いので、一つ一つの舗石や店の看板ごとに、階段の一段ごとに、そして建物の大きな門をくぐるたびごとに、歩く人の夢の中にこの町はそっくり入り込みにくいではなかろうか。(中略)パリを遊歩者の約束の地にしたのは、(中略)よそ者ではなく、彼ら自身、つまりパリの人々なのだからである。風景——実際パリは遊歩者にとって風景となるのだ。あるいはもっと正確に言えば、遊歩者にとってこの町はその弁証法的両極へと分解していくのだ。遊歩者にとってパリは風景として開かれてくるのだが、また彼を部屋として包みこむのだ」¹⁹⁾。

「遊歩者にとってパリは風景として開か」れるばかりでなく、「部屋として包み込む」存在でもあると、ベンヤミ

ンは指摘する。過去の人びとの歴史が記憶として刻み込まれた建物や広場が多く存在するローマは、建物に蓄積された時間の営みが持つ遠い記憶の数々を、歩く人びとに呼び起こすことで、今を生きる人びとと町との関わりを難しくする。しかし、人びとの生活が息づくパリは、その町を歩く人びとの今と結びついた風景をさまざまな所に開く存在であり、心の拠り所としての空間を、そっと用意してくれる存在でもある。町を歩く人びとであるベンヤミンの「遊歩者」にとって、パリの街路は「弁証法的両極」に分解された存在として、その姿を現す。そして「遊歩者」は、「誰からも注目されていると感じていて、まさにいかがわしさそのもの、他方では、まったく人目に触れない、隠れこもった存在」²⁰⁾として、私たちの前に現れるのである。

「遊歩者」にとって、パリが「弁証法的両極」に分解された存在として現れるのは、「遊歩者」が、その両極を自らのなかに体現した存在であることに由来する。「遊歩者の生活様式は、心地よい幻影の裏に大都会の未来の住民の悲慘を隠すものだ。遊歩者は群衆の中に逃げ場を求める。群衆とはヴェールであって、これを通して見ると、遊歩者には見馴れた都会が、魔術幻灯で動いているように思われる」²¹⁾と、ベンヤミンが指摘するように、個人として都会の生活のなかに心地よい幻影を抱くその傍らで、群衆というヴェールを通して、都会に魔術幻灯を夢見るのが、「遊歩者」としての存在である。そしてこうした「遊歩者」の前に、「弁証法的」空間として現れるのが、パリのパサージュに代表される商業的空間である。それは、商業的空間こそ、ヴェールとしての群衆が存在する空間だからである²²⁾。

商業的空間は、私たちの生活様式と結びついた空間として存在する。私たちの生活様式は、私たちの〈現在〉を、商業的空間のなかにさまざまな形で演出する。商業的空間は、群衆というヴェールを通して、私たちにさまざまな夢や希望を与えるとともに、人びとが行う商品への消費行動のなかに、それらを演出していくのである。

IV 空間体験と人間

1. 体験する空間

学生時代に友と歩いた街並みを、何年かぶりに一人で訪れたとき、時間の流れの中で大きく変化した街の風景のなかに、変わることなく存在する小さな古書店を見つけたことがある。古書店の側の古ぼけた喫茶店や中華料理店は、今はなく、車が数台止まることの出来る駐車場と、真新しい壁に色とりどりの装飾を凝らした小さなブティックが、「学生街」としての街並みに新たな彩りを与えていた。こうした彩りを持つ「学生街」のなかで、その古書店は、私たちが数十年前に送った学生時代の記憶を、今も変わらぬひっそりとした佇まいのなかに、残していた。

古書店のなかには、私の学生時代とは本の配置も変わり、奥に座り、時間の流れを顔の額の皺のなかに刻み込んでいた店の主人も変わっていた。しかし、数十年という年月の

経過のなかで、その時々を時間を記憶として蓄積した古書の数々が、店の本棚に分野を分けて配置されている風景は、私にとって学生時代の記憶を甦らせる空間として存在したのである。

空間とその空間を構成する建築や物の布置は、時間の経過とともに無意識の層に押し込めていたさまざまな記憶と結びつくことで、私たちに、時間の壁を超えた体験を可能にする。体験する空間は、私たちの記憶と結びついた遠くのはるかな時代の思い出として現れる。そしてそれは、記憶と結びついた創造力としても現れるのである。

バシュラールは『空間の詩学』のなかで、空間としての家により、私たちは思い出と記憶以前との綜合を明らかに照らし出す夢想の閃きを思い起こすことになる、と指摘する。それは、記憶と創造力が、互いに働きかけ、互いに深化し合う価値の世界のなかで、思い出とイメージの共同体を作り上げるからである。空間としての「家のもっとも貴重な恩恵はなにかとたずねられたならば、家が夢をかくまい、夢みるひとを保護し、われわれに安らかに夢みさせてくれる」ことにあり、バシュラールは指摘する。それは、彼によれば、人間的価値を確証するものが、「経験と思想」だけではないからである。「夢想には人間の深部を指示する価値」があり、「夢想には自己に対する価値附与作用という特権」もある。そして夢想により、私たちは自分の存在を直接楽しむことを可能にするのである。バシュラールにとって空間としての家は、「人間の思想や思い出や夢にとって、もっとも大きな統合力の一つ」として存在するばかりでなく、「肉体とたましい」としても存在するのである。なぜなら、それは「人間存在の最初の世界」が、空間としての家だからである。「性急な形而上学者の主張をかりていえば、『世界になげだされる』まえに、人間は家の揺籃のなかにおかれている」のである²³⁾。

バシュラールにとって、空間としての家を持つ意味は、夥しい思い出が保存される場所である。そして、その思い出を保存する空間としての家の構造が複雑になり、屋根裏部屋や片隅や廊下を持つようになると、その思い出はいっそう表情豊かな隠れ家を持つことになる²⁴⁾。バシュラールの指摘する豊かな表情を持つ思い出は、その思い出を記憶として保存する家を持つ空間的構造と密接に結びついているのである。しかし、こうした豊かな表情の思い出と結びついた空間は、バシュラールの指摘する複雑な構造を持つ「家」にのみ、存在するのではない。

「広島はモニュメントの都市だった。広い通りに沿って、点々とモニュメントが並んでいる。一番驚いたのは、あの世界一無意味で理不尽な爆発があった時、怪我人の看護にあたって命を落とした人々の慰霊のモニュメント」だった。広島を訪れたいとうせいこう氏は、原爆に被災した広島が持つモニュメントの数々に、「筆舌につくしがたい」恐ろしさを感じた。そして、そのモニュメントが持つ迫力に耐えられなくなったとき、近くのコンビニエンス・ストアに逃れた。いとう氏によれば、それはコンビニエンス・スト

アが、「歴史の重みと無関係な空間」であり、「過去を断ち切ってしまう」カミソリのような力を持つ空間として存在したからだという²⁵⁾。

バシュラールの「家」は、個人の思い出と結びついた空間として存在した。しかし、過去に人びとが体験した出来事を記念するモニュメントが並ぶ空間は、過去の出来事を記憶として保存することで、今を生きる私たちに、共通の体験を強いる空間としても存在するのである。いとう氏が、モニュメントの持つ迫力に耐えられなくなり、コンビニエンス・ストアに逃れたのは、現在と未来のみを志向することで、過去と無縁な時間を生きる空間としてのコンビニに、つかのまの安らぎを求めたことによる。空間には、固有の意味が存在するのである。

2. 原風景としての空間

忘れ物をしてしまった、という欠落感とともに朝の眠りから覚めることがある。そんな時、眠りのなかで夢を見ていたのは、きまって小学生の頃のあの日の出来事である。

季節は6月の中旬、朝から少し蒸し暑い日の出来事だった。その日は学校の帰りに友人と二人、あるお店で買い物をする約束をしていた。何を買う予定だったのかは、いまでは思い出すことはできないが、その日の朝、学校について友人の顔を見たとき、買い物に必要なお金を忘れてしまったことに気がついたのである。1時間目、2時間目と授業は進んでゆく。そして買い物をする時間は近づいてくるが、友人にはお金を忘れたことを言い出すことができなかった。その日に買い物をすることは、1週間前からの約束で、確か私が友人に同行を頼んだことだったのである。午後の授業も終わり、下校時間も近づいてきた。友人と一緒に買い物に行く約束の時間が来たのである。小学校の校門でお金を忘れたことをあやまろうと待っていた私の所に、友人が来て申し訳なさそうな顔で、その日は急用が出来たため、授業が終わり次第、直ぐに帰宅するよう母親からいわれた、と告げたのだ。朝友人の顔を見た時から、忘れてしまったことをいつ伝えたらいいのかと思い悩んでいた私だったが、その校門での友人の言葉は、そうした私の悩みを一挙に解き放ってくれたのだ。だがそれとともに、私の方から先に言い出せなかったことに対する負い目が、心の負担として私のなかに、その後も残った出来事だったのである。友人を待っていた校門の側には、紫陽花の花がたくさん咲いていた。そして、その花の鮮やかな青さが、今でも私の記憶のなかに焼き付いている。青い紫陽花の花咲く小学校の校門は、私にとって、忘れてしまった約束を自ら言い出せなかったことへの後悔の念と結びついた空間として存在している。空間は、ある種の体験と結びついて存在するのである。

青春期の自己を形成する空間であり、深層意識のなかに固着し、血縁・地縁の重い人間関係と分かちがたく絡み合い、無意識の内に自らの表現を規定する空間としての「原風景」を、私たちは記憶のなかに持っている。さまざまな

文学表現を読み解いた奥野健男氏は、作家の美意識や作品のイメージ、モチーフを支える深層意識の舞台としての「原風景」を、多くの文学作品のなかに見出している²⁶⁾。奥野氏の「原風景」は、作家の文学作品の表現としてのみ存在するのではない。私たちの記憶のなかの「原風景」は、それぞれが持つ固有の体験と深く結びついて存在するのである。

「原風景」は、単なる風景として存在するのではなく、時間と記憶が蓄積した、地縁や血縁の複雑にかままる恥とコンプレックスと憎しみのつぼとして存在する。と同時に、なつかしくかなしい安息の母胎としても存在するのである。

奥野氏は、「原風景」が成長段階の二つの時期に作られると指摘する。7・8歳頃までの「父母や家の中や遊び場や家族や友達などの環境によって無意識のうちに」作られるのが一つ時期。そして、20歳前後の「もっとも感受性が強い人格形成期に受ける原体験や感銘」により作られるのが、二つ目の時期である²⁷⁾。

風景の表現を、自己と対象との相互交渉の表現と捉え、自己表現でもあり、対象表現でもあると指摘するのは、『原風景試論』のなかの関根康正氏である。風景の特質は、そのなかに自己の存在を内包せざるを得ないと、関根氏は指摘する。それは自己と環境が、常に連動して存在するからである。関根氏は、1000人を超える大学生へのアンケート調査から、自己の存在を内包した「原風景」のイメージとして、7つの要点にまとめている。①自然のゆたかな故郷が私をとりまくミクロコスモスとしてまとまった風景を作るもの、②子ども時代に心に刻まれた風景の中核をなすもの、③自然のうちに思いがけず見た不思議、恐怖の風景で心を強く捉えるもの、④心底やすらげる場所としてイメージされ、その中核に家として存在しているもの、⑤都会出身者にとって、あこがれという形の追い求める自然としてイメージされるもの、⑥全身で参与した私だけが創り上げたもの、⑦未来に向かって保持し、追い求めようとする今の心に生きているもの、がそれである。こうした要点から関根氏は、「原風景」が「己の住まうべきすなわち創造すべき生活空間のイメージモデルを提供する」として、その基底に①幼児期の生活空間が反映されていること、②強いミクロコスモスへの志向を持つことという、2つの基本的な特徴があることを明らかにしている²⁸⁾。

風景は自己の存在を内包する。それは関根氏の指摘を待つまでもなく、風景と私たちの体験が密接に結びついた不可分の関係にあることを示している。そして、成長過程のなかの自己形成と結びついた出来事を、特定の風景とともに体験することで、私たちはその出来事の一コマを、「原風景」として記憶するのである。

3. 空間体験と人間

都市は、幾世代にも渡る人びとの時空意識が集積した空間として存在する。都市は、さまざまな人びとの記憶が蓄積された空間として存在しているのである。建築家リノク

ラテス計画による都市アレキサンドリアは、その中心に数十万巻の書物を所蔵する図書館があり、文字の書かれた書物というメディアを集積することで、記憶の都市として存在した。都市の場所や空間は、人びとの出来事や天変地異を、さまざまな形で記憶しているだけでなく、古代の記憶術が、場所や空間をキイとして記憶する精神の技術だったことから、都市は人びとの記憶と密接に結びついて存在する、といわれるのである²⁹⁾。

人びとの記憶と結びついた空間は、私たちが行う共同の体験が、物や場所にさまざまな形で蓄積された空間として存在する。共同の体験が蓄積された物や場所の存在する空間は、私たちにとって、多様な意味が織りなす世界として、その空間を演出する。多様な意味に演出された空間体験は、私たち人間が知覚する世界の広がり大きく変化させることになる。

私たちの空間体験と知覚との関係について、寺本潔氏による子どもの手書き地図を用いた研究がある³⁰⁾。空間体験と知覚との関係を調べる上で、子どもの手書き地図を用いることについて寺本氏は、「手書き地図は、描くという作業が介在することによって、描いた人間の内的表象がそのまま地図として表現されるとは限らない点にその最大の問題点がある」と指摘する。特に描き手が子どもである場合、「描こうとする表象をどう頭のなかで思い浮かべることができるのか、という心理発達上からくる一定の制約」も存在する。しかし、こうした限界の一方で、手書き地図は「極めて主観的で個性的な表象を示しているとも考えられることから、描き手個人の意味づけや場所への価値づけ、趣向、あるいは空間に対する好き嫌いなどを生き生きと表現」する可能性がある。さらに、「大人とは違った知覚の仕方や空間行動の現れを把握」可能にする。

寺本氏は、手書き地図から、都市部、農村部、山村部に住む子ども達の表現の違いに注目する。都市部の子ども達の手書き地図では、道路網に対する表現の範囲の広がり、彼らの発達を示す指標として捉えられている。手書き地図を画く場合、地図の持つ座標系が、描き手の知覚する空間のあり方を示すことになる。座標系は、知覚空間の「構造化を進める上で」、欠くことのできない枠組みとして存在するからである。外界としての空間を分節するとき、私たちは自らの知覚空間のなかに意味ある構造の体系として、外界を位置づける。そしてその位置づけの基本となるのが、空間を知覚の対象として把握するために必要とされる座標系の設定である。都市部の子ども達の特徴は、「まるた通り」「からすま通り」に代表される道路が、彼らの知覚空間の座標として使われている。農村部の子ども達の手書き地図は、都市や山村部に比べ、広範囲にわたるものが描かれる。これは、「農村の多くが平野に立地し、景観的に見通しが効く」ことに最大の要因があるとされている。最後に、山村部の子ども達の手書き地図の特徴は、描かれる範囲が集落の周辺に限られること、道路が極めて重要な要素となっていること、地図には学校が必ず記入されてい

ること等が指摘されている。

都市部、農村部、山村部の子ども達により描かれた手書き地図には、明らかな特徴の違いがある。それは、子ども達が日常生活を送る空間の行動や体験から生み出される彼らの知覚空間が、手書き地図のなかに構造の違いとして表現されたからである。寺本氏は、環境の異なる子ども達の知覚する空間の構造を、手書き地図を用いて分類し特徴づけたのである。寺本氏はさらに、発達段階を経るなかで子ども達の手書き地図が、道路を中心として線的な広がり表現したルート・マップ型から面的な広がりを持つサーベイ・マップ型へ移行することを、多くの事例から実証している。

都市部、農村部、山村部に生きる子ども達の日常生活のなかで体験する空間的な「見え」は、彼らの知覚空間の構造を異なるものにしている。そして、発達段階における手書き地図のルート・マップ型からサーベイ・マップ型への移行は、成長期にある子ども達が持つ空間体験の変容が、彼らの知覚する空間の広がり結びついて存在することを示している。私たちの知覚する空間の構造は、空間体験と結びついているのである。

V おわりに

過去の記憶を持たない空間であり、常に現在としてのみ存在し続ける空間でもあるコンビニエンス・ストアで、いとうせいこう氏は、一時「歴史の重み」から開放される空間体験を実感した。いとう氏によれば、「広島はモニュメントの都市」である。広い通りに沿って、点々とモニュメントが並んでいる。モニュメントは、都市の持つ記憶を記念碑や建物として残すことで、その空間の持つ過去の記憶を目に見える形で私たちの前に示してくれる。こうしたモニュメントの並ぶ空間は、空間が時の流れのなかで蓄積してきた記憶を、モニュメントという物理的な形式のなかに保存する。歴史の記憶を保存するモニュメントの並ぶ空間は、「歴史の重み」を持つ空間として、私たちの前に現れる。広島で入ったコンビニエンス・ストアは、「無関心な明るさ」のある商品がおかれ、「ギンギンに明るい照明の下では、すべてがフィクション」として存在する空間として、いとう氏の前に現れた。こうした空間のなかでいとう氏は、自らのにしかかる「歴史の重み」からやっと開放されたのである。

コンビニエンス・ストアに代表されるように、過去の記憶を持たず現在にのみ生きる空間、それは常にフィクションのみが闊歩する空間として存在する。

私たちの自己は、さまざまな社会的役割を通して多面的に形成されている。こうした社会的な役割は、発達過程のなかで①家族同一性②国籍同一性③民族同一性④性同一性⑤職業同一性として、自己のなかに形成されるのである³¹⁾。ところが、その社会的な役割としてのさまざまな同一性は、自己の不変性と連続性に対する確信と、他者からの承認に

対する確信という、二重の確信の下に保証されて存在する。それは言葉を換えれば、自己の記憶と行為への二重の確信から保証されるということである。

こうした同一性は、青年期の病理としては同一性障害として現れるが、エリクソンは、その原因の一つに「時間的展望の拡散」を指摘している。「時間的展望の拡散」は、「時間が変化をもたらす可能性に対する決定的な不信と、それにもかかわらず時間が変化をもたらすことに対する激しい恐怖」から成り立っている。「時間的展望の拡散」は、「時間体験」の障害として現れる。この障害は、非常な危機が切迫しているという切迫感と、時間意識の喪失から成り立っているのである³²⁾。

『原風景試論』のなかで関根氏は、「原風景」は「己の住まうべきすなわち創造すべき生活空間のイメージモデル」を私たちに提供するとしている。それは「原風景」が、幼児期の生活の記憶を保存するとともに、現在を幼児期の記憶の先に繋ぎ止め、未来への志向へと導くことを可能にするからである。「原風景」は、空間体験と結びついた記憶が形作る、過去から現在、そして未来を志向する「時間的展望」を私たちに与えてくれる。そしてその「時間的展望」は、自己同一性の中核である記憶と結びついた時間体験を、私たちに与えてくれる。

私たちが知覚する空間の構造は、空間体験と結びついて存在する。そしてその空間体験は、私たちの自己同一性を保証する記憶と結びついた時間体験としても存在するのである。

環境経営研究所の研究費の給付を受けたことを記して、関係者の皆様に感謝します。

注

- 1) 種村完司(1994)、p. 47。
- 2) 福原麟太郎・中野好夫(1980)、p. 89。
- 3) 丸山圭三郎(1985)、pp. 64-65。
- 4) J. ユクスキュル(1995)、pp. 140-141。
- 5) Y. トゥアン(1996)、pp. 10-11。
- 6) Y. トゥアン(1996)、pp. 104-107。
- 7) 内田芳明(1985)、p. 187。
- 8) 柳田国男(1979)、p. 304、大藤時彦氏による解説より。
- 9) 柳田国男(1979)、pp. 14-15。
- 10) 柳田国男(1979)、pp. 54-56。
- 11) 谷川健一(1997)、pp. 218-219。
- 12) 内田隆三編(1998)、p. 43。
- 13) M. エリアーデ(1980)、pp. 52-55。
- 14) 山口昌男(1975)、p. 96。
- 15) 奥井智之(1996)、p. 9。
- 16) T. パーソンズ他(1978)、pp. 4-5。
- 17) 藤田弘夫(1991)、pp. 45-46。

- 18) 藤田弘夫(1991)、p. 80。
- 19) W. ベンヤミン(1999)、pp. 70-71。
- 20) W. ベンヤミン(1999)、p. 77。
- 21) W. ベンヤミン(2000)、p. 45。
- 22) 鹿島茂(1996)、p. 62。
- 23) G. バシュラール(1981)、pp. 40-41。
- 24) G. バシュラール(1981)、p. 43。
- 25) 泉麻人・いとうせいこう(1990)、pp. 28-29。
- 26) 奥野健男(1989)、pp. 44-45。
- 27) 奥野健男(1989)、pp. 54-55。
- 28) 関根康正(1982)、pp. 164-193。
- 29) 毛綱毅曠(1987)、pp. 32-36。
- 30) 寺本潔(1994)、pp. 95-107。
- 31) 遠藤辰雄編(1993)、p. 80。
- 32) E. H. エリクソン(1983)、pp. 166-168。

参考文献

- 1) E. H. エリクソン(1983)『自我同一性』誠信書房。
- 2) G. バシュラール(1981)『空間の詩学』思潮社。
- 3) J. ユクスキュル(1995)『生物から見た世界』新思索社。
- 4) M. エリアーデ(1980)『イメージとシンボル』せりか書房。
- 5) T. パーソンズ他(1978)『都市化の社会学〔増補〕』誠信書房。
- 6) W. ベンヤミン(2000)『パサージュ論Ⅰ』岩波書店
- 7) W. ベンヤミン(1999)『パサージュ論Ⅲ』岩波書店。
- 8) Y. トゥアン(1996)『個人空間の誕生』せりか書房。
- 9) 泉麻人・いとうせいこう(1990)『コンビニエンス物語』新潮文庫。
- 10) 内田芳明(1985)『風景の現象学』中公新書。
- 11) 内田隆三編(1998)『情報社会の文化2』東京大学出版会。
- 12) 遠藤辰雄編(1993)『アイデンティティの心理学』ナカニシヤ出版。
- 13) 奥井智之(1996)『アジールとしての都市』弘文堂。
- 14) 奥野健男(1989)『増補文学における原風景』集英社。
- 15) 鹿島茂(1996)『「パサージュ論」熟読玩味』青土社。
- 16) 関根康正(1982)「原風景試論」京都大学人類学研究会編『季刊人類学13-1』講談社。
- 17) 谷川健一(1997)『日本の地名』岩波新書。
- 18) 種村完司(1994)『知覚のリアリズム』勁草書房。
- 19) 寺本潔(1994)『子どもの知覚環境』地人書房。
- 20) 福原麟太郎・中野好夫監修(1980)『シェイクスピア全集2』筑摩書房。
- 21) 藤田弘夫(1991)『都市と権力』創文社。
- 22) 丸山圭三郎(1985)『文化のフェテシズム』勁草書房。
- 23) 毛綱毅曠(1987)『都市の遺伝子』青土社。
- 24) 山口昌男(1975)『文化と両義性』岩波書店。
- 25) 柳田国男(1979)『地名の研究』角川文庫。